

- 現象. <https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/elnino/index.html>. (2024年8月15日確認).
- 気象庁 2024d. 地球温暖化と十年規模変動. [http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/mar\\_env/knowledge/ohc/hiatus.html](http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/mar_env/knowledge/ohc/hiatus.html). (2024年8月15日確認).
- 気象庁 2024e. エルニーニョ / ラニーニャ現象 > エルニーニョ / ラニーニャ現象に関する知識 > 日本の天候に影響を及ぼすメカニズム. <http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/data/elnino/learning/faq/whatiselnino3.html>. (2024年8月15日確認).
- 気象庁 2024f. 太平洋の海面水温に見られる年～数年規模の変動. [https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/climate/knowledge/pac/pacific\\_annual.html](https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/climate/knowledge/pac/pacific_annual.html). (2024年8月15日確認).
- 気象庁 2024g. インド洋に見られる海面水温の偏差パターンと日本の天候. [https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/climate/knowledge/ind/ind\\_doc.html](https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/climate/knowledge/ind/ind_doc.html). (2024年8月15日確認).
- 北海道農政部 2024. 作物展望. ニューカントリ－ 2024 1月号, 48 – 62.
- 北海道農政部・北海道農産協会 2024. 令和6年度に向けての米づくり. <https://hokkaido-nosan.or.jp/products/rice/komedukuri/page-9643/>. (2024年8月15日確認).
- 広田知良・中辻敏朗・小南靖弘監修 2021. 北海道の最新農業気象. 気候変動に対する営農技術最前線. 北海道協同組合通信社. (2024年8月15日確認).
- 文部科学省・気象庁 2020. 「日本の気候変動2020—大気と陸・海洋に関する観測・予測評価報告書—」(2020年12月公表).
- <https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ccj/index.html>. (2024年8月15日確認).
- 日本学術会議 2023. 見解 気候変動に対する国内農業の適応策と食料安定供給へ果たす農業生産環境工学の役割. <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-k230926-15.pdf>.
- 農林水産省 2024a. 作物統計. <https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/index.html>. (2024年8月15日確認).
- 農林水産省 2024b. 米穀の農産物検査結果等. <https://www.maff.go.jp/j/seisan/syoryu/kensa/kome/>. (2024年8月15日確認).
- 農林水産省 2024c. 令和5年夏の記録的高温に係る影響と効果のあった温暖化適応策等の状況レポート. <https://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/ondanka/attach/pdf/report-70.pdf>.

## 統計データから

### 米の全体需給の状況の推移

今年の夏の猛暑は大変であったが、毎日食べる米がスーパー・マーケットなどの売り場から姿を消し、「令和の米騒動」とも言われた。9月に入って新米が出回り落ち着いたが、消費者を一時的に不安にさせた。

そこで、農林水産省のお米を巡る資料から、米の総需要量と生産量・作況指数の推移をポイント的に抜粋し、表-1に示した。

米の総需要量、生産量ともに年々減少している。需要量は1963(昭38)年の1,341万tから2023(令5)年には804万tと60%に、生産量も1967(昭42)年の1,445万tから2023年には791万tの55%にまで減少している。

表-1では需要量に比べ生産量が上回る年をグリーンで、その逆をピンクで示した。1967(昭42)、1975(昭50)、1977(昭

52)年は豊作(作況指数112, 107, 105)で米の余剰が問題となり、過剰米処理が行われた。一方、1980(昭55)、1993(平5)、2003(平15)年は作況指数のそれぞれ87, 74, 90と不作年に当たり、生産量は需要量の80%台程度にしか確保出来ていない。

このように、米の短期的な需要量には大きな変動がないものの、生産量はその年の気象の影響に左右される不安定性がある。近年の2015(平27)年以降は、需要量に見合う生産量が安定的に確保されていたが、2024年の米騒動は前年産の作況指数が101と不作ではなかったにも拘わらず、少しの供給と需要のバランスの崩れで生じたものであり、やはり国民の主食である米は余裕のある生産量の確保が重要である。 (K. O)

表-1 米の全体需給の状況の推移

年 産	1963	1967	1970	1975	1977	1980	1984	1986	1988
総需要量 万t (A)	1,341	1,248	1,186	1,196	1,148	1,121	1,094	1,080	1,058
生産量 万t (B)	1,281	1,445	1,089	1,317	1,310	975	1,185	1,165	993
作況指数	101	112	93	107	105	87	108	106	97
B/A %	95.5	115.7	91.8	110.1	114.1	87	108.3	107.9	93.9

  

年 産	1991	1993	1994	1998	2003	2008	2013	2018	2023
総需要量 万t (A)	1,061	971	861	946	891	842	832	813	804
生産量 万t (B)	960	783	1,198	896	779	882	872	821	791
作況指数	95	74	109	98	90	102	102	98	101
B/A %	90.4	80.6	139.1	94.7	87.4	106	104.8	101	98.3

注) 総需要量は、国内消費仕向量(陸稻を含み、主食用(米菓・米穀粉を含む)のほか、飼料用、加工用等の数量)である。

生産量は、国内生産量(「作物統計」の水陸稻の収穫量の合計に、飼料用米の数量を加えた数量)である。